



平成 26 年 5 月 8 日

明秀学園日立高校陸上競技部通信 第 1 号

～明るく・清く・凛々しく～

contents

- ・第 1 号発行にあたって
- ・陸上競技部指導理念
- ・地区大会結果報告
- ・今後の公式試合、記録会参加予定

新学期が始まり約 1 ヶ月が経過しました。1 年生は本校の建学の精神、校訓を覚えることができましたか。明秀生である以上、本校の建学の精神に適うよう、学校生活を送っていかなくてはなりません。是非、早めに覚えましょう。

凛々しく

清く

明るく

建学の精神

協力

勤勉

自律

敬愛

至誠

校訓

さて、今回の部活動通信は、本校陸上競技部が創部以来の創刊です。生徒たちのモチベーションアップや活動状況報告、保護者の方々への連絡やお願いなどさまざまな内容を掲載させて頂きたいと思っています。

指導理念について

本校の陸上競技部には、スポーツ奨学生として入学している生徒、本校で陸上をやると決めて一般で入学している生徒、高校からはじめて陸上に挑戦する生徒、また、高校生活において部活動を通し人間性を高めることを目標として入部してきている生徒などさまざまです。目的は人によって違いはあっても、部活動をやろうと、競技性を高めることと、人として自分を向上させることは同等として考えて活動してもらわなくてはなりません。

その活動を実践して行く上で、本校陸上競技部は、賢く・逞しい選手の育成をモットーとしています。それは、競技力を向上させるために必要であるのは勿論、今後の社会生活を送るにあたって重要であると考えからです。ここで申し上げている賢さ・逞しさとは、単に才知にたけ、強固であれというものではありません。私の考える賢さ、逞しさとは、人の見方や物事に対して公平であり、意志が強く、根気強いということです。

昨今、グローバル化などよく耳にするものの、子供たちが吸収しようとしている情報は、個人で偏りがあるように見受けられます。不必要と判断した情報や知識は「興味が無いから」の言葉で片付けてしまい自分の中に入れようとしません。それは、自ら学ぶ機会を断ってしまっているようにも見えます。

私は、生徒たちに公平な考え方のもと行動できる人間に育って欲しいと強く思っています。その考え方のもと、しかるべきときには、率先して人を勇気づけ、励ますことのできる優しさを持ってもらいたい。そのためには、主体的に学び、根気強くタフにならなくてはなりません。お手軽に、短期間で身につくスキルなどどこにもありません。勉強で例えるなら、1 回の模試対策に限った勉強を短期講習のみ集中的に受講し、1 度、偏差値が上がっても、それは自分の力として身についたものにはなっていません。しかし、主体的に根気強く取り組むことで身につけた学問は決して忘れることはないのです。

トレーニングに関しても、色々な方法がありますが、目新しい道具を使った技術練習や見た目に格好いい動きを取り入れ、俄かに自分のパフォーマンスが上がった気になれる練習はあります。しかし、見た目に拘った練習はすぐに飽きますし、そればかり追い求めているは基本のスキルが向上しません。その場を楽しく、満足するための練習の積み重ねでは自分の目指す選手像や、目標とする記録には近づくことができないのです。

もう一つ付け加えさせて頂きたいのが、生徒のコミュニケーション能力の養成です。生徒同士の関係は稀薄になりつつある傍ら、携帯電話が生徒たちのコミュニケーションツールの筆頭になっていることに加え、今までの義務教育で個性を尊重され過ぎてしまったことで、自分本位の主張にばかり終始してしまう傾向があります。したがって、会話する人数の多少に関わらず、相手に自分の言いたいことをなかなか伝えられなかったり相手の言っている内容を聞き取る（理解する）ことが苦手になっているようです。人は、聞いた話を完璧に聞けたと思っていても、せいぜい 60%程度しか理解していない事が大半だそうです。それは、相手の話を聞きながら自分の今までの経験やその場の感情、そして自分が話しを聞き終える前に「～であろう…」という想定のもと、相手の話を聞いている側が加工してしまうからです。

伝える側も自身の考えや感情がなかなか表現できず「わかってもらえない…」とイライラしたり、諦めてしまったりすることもあるようです。日常生活において、周囲との聞く・伝えるというやり取りがスムーズでないため、話し合いもままならず、さらに関係が稀薄になっていくという負の連鎖が起こるケースも少なくありません。

友人関係を良好にするためにも、学問を身につけるのにも、また、競技に必要な技術を身につけるためにも人の話が聞けることやアドバイスを把握するということが、自分の意見や考えを相手にきちんと伝えることはと

でも重要なことです。どのような場面においても常に人は人間関係に配慮していかなくてはならない環境にあります。難しくても努力し、部活動を通しコミュニケーション能力を身につけることで、将来の社会生活に大いに役立たせてもらいたいと思っています。

《県北地区大会結果》

3年 荒川 怜央 [円盤投 1位 36m74(大会記録)・1位 槍投げ 51m99]

3年 石井 司 [三段跳 1位 13m18]

3年 鈴木 雄登 [100m 1位 10" 92・200m 1位 22" 27]

3年 吉村 圭祐 [槍投げ 5位 46m17]

3年 橋本 真央 [100m 3位 13" 42・100mH 1位 15" 98]

2年 佐藤 拓也 [100m 2位 11" 25・200m 4位 23" 13]

2年 高橋 貴洋 [200m 3位 23" 03・400m 3位 51" 67]

2年 須崎 昂哉 [400m 7位 53" 06]

2年 町田 準太 [円盤投 2位 31m37]

2年 鈴木 楓香 [100m 5位 13" 65・200m 6位 28" 38]

2年 細井 優花 [100mH 5位 18" 25・400mH 5位 1' 12" 16]

2年 割貝 麗奈 [200m 5位 27" 95・400m 9位 1' 03" 42]

1年 市川 貴大 [走幅跳 9位 5m21]

1年 関 皓斗 [走幅跳 5位 5m54]

1年 志賀村 未駆人 [砲丸投 7位 8m42]

1年 高野 寛生 [走高跳 5位 1m60]

1年 高橋 惇美 [走高跳 2位 1m40]

※ 男子 4×100mR 43" 42 (2位) 大高・須崎・鈴木・佐藤

4×400mR 3' 24" 88 (1位) 須崎・高橋・大高・鈴木

※ 女子 4×100mR 51" 58 (2位) 細井・割貝・田沼・橋本

4×400mR 4' 14" 84 (5位) 鈴木・割貝・細井・橋本

○地区大会の各種目上位8名と前年度県高校新人大会8位までに入賞した選手が県大会の出場権を得ます。

(女子の400mは前年度の県新人大会で県北地区の選手が2名入賞しているため今回の地区大会では上位10名が県大会に出場できます。男子の走幅跳などもそのケースと同様です。前年度の県新人大会で、各種目の入賞者が多い地区は、その分、その種目の県大会への出場枠が地区で増えるということになります)

5月・6月の公式試合・記録会

大会名	期 日	場 所
茨城県高校陸上競技対抗選手権大会(関東大会予選)	5月21日(水)～24日(土)	笠松運動公園陸上競技場
関東高校陸上競技対抗選手権大会(インターハイ予選)	6月20日(金)～23日(月)	相模原市麻溝運動公園陸上競技場
日立記録会	6月15日(日)	日立市民運動公園陸上競技場

あとがき ～ 1年生へ ～

みなさんが今までよく口にした「ぜんちゅう(全中)」は全日本中学校陸上競技大会の略ですね。中学生は、通信陸上競技大会及び、総合体育大会において標準記録を突破した人が全国大会への出場資格を得ることができます。それは十分ご存知ですね。ここでは、高校生が全国大会(インターハイ)へ出場するまでのプロセスを説明しておきます。

《4月の地区大会で上位8名が県大会へ→5月の県大会で上位6名が関東大会へ→6月の関東大会で上位6名が7月後半から行われるインターハイへ出場》というように勝ち上がらなければなりません。

関東大会は以下のように北と南に分かれています。

北	南
茨 城	東 京
栃 木	神 奈 川
群 馬	千 葉
埼 玉	山 梨

大会は同じ会場で開催されます。インターハイに出場できる選手は北関東の4県から上位6名、南関東の1都3県から上位6名となります。したがってトラックレースもフィールド種目も予選→決勝を北と南に分けて行い上位6名を決定します。

いいいですか、1年生。もうわかりましたね。中学校と違い、高校には自分の競技の片手間(陸上部以外の所属ではあるが、陸上の記録が良いため大会に出場する)で陸上の大会に出場できるようなシステムはありません。そして中学生と違い、高校生は1度きり記録を出しても全国大会へは出場できないのです。各予選大会を勝ち抜かなければインターハイへは出場できません。単に早い・跳べる・投げられる選手では勝ちあがれないのです。ですから、心身ともにタフにならなくてはなりません。遅くならなければ上の大会へは出場できないのです。

(発行は不定期です)

MEISHUGAKUEN HITACHI HIGH SCHOOL 2014

TRACK&FIELD